
光になれっ！

後方の青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光になれっ！

【Nコード】

N7418B

【作者名】

後方の青

【あらすじ】

柚木光。それなりに美少年、割と無口、自己紹介が破滅的なまでに苦手、家事スキル高く、女性の趣味は可愛らしい年上。そして――変人に好かれる才能あり。

1:自己紹介するのが恥ずかしいと思うのは俺だけなのか？（前書き）

誤字脱字、感想意見がありましたら遠慮無くどうぞ。ヘタレですが
それなりに頑張ります（´、`）

1：自己紹介をするのが恥ずかしいと思うのは俺だけなのか？

俺、ゆきひかる柚木光はこれから通う高校の入学式の為に、母親が何をトチ狂ったのか買ってしまったブカブカの学ランを来て歩いていた。

「……ねえ、あの子——」

「——だよー……」

通学路を歩いている沢山の人間の視線が俺に集まっている様な気がして煩わしい事この上ない。

「いやはや、相も変わらず美少年の光ちゃんは注目の的ですなあ。羨ましい限りでさ」

隣で奇妙な日本語を使う男は田中花太郎たなか はなたろうという、少しばかり頭の具合が哀想な奴である。ちなみに俺からすれば花太郎も充分整った顔立ちなのだが、コイツが異性と二人きりで居る所を見た事が無い。「それにしてもねえ、何でまたブカブカな制服？可愛い男の子でも演じてアピールでさ？萌え萌えアピールでさ？」

「うざい」

面倒なので切って捨てる。

「美少年に毒舌…アンバランスな魅力でさあ。さすがの花ちゃんもメロメロよ」

花太郎は俺の拒絶などまるで無かったかの様に笑いながら抱きついてきた。正直煩わしい。

「まさか、あの二人って……」

「でも、お似合いかも」

まあ、もしかしくなくても花太郎に女つ気が無いのは俺相手にこんな事ばかりしているからである。従って俺もコイツとつるむ様になつてから色恋沙汰などとはまったく無縁の生活を送っている。

「花太郎」

「ん？」

「……いや、いい」

たまに思う。コイツ、本気で男色の気があるんじゃないか？

抱きついたらまま離れない花太郎を引きずりながらの初登校は中々に重労働だったが、中学生の頃からの習慣だと思えばそう辛くはない

「――訳無いだろうが、離せ」

校門の前で俺達を見て教師らしき人達が驚愕の表情を浮かべていた。流石にまずいと思って花太郎を振り払う。

「何でさ？いつもの事だし、高校生になったら昔の馴染みは切って捨てるつもりでさ？それは酷い！」

「煩い黙れ。あそこに居る教員連中を見る、入学早々生徒指導室にでもいきたいのか？」

ふと思いつく。中学の頃に漫研の部長をしている女子が俺と花太郎を見て、『ほほう…不純性交遊ですか。リアルでお目にかかれるとは思いませんでしたが、それにしても絵になりますねえ…美少年の絡みってやつは』と言っていた。本当にどうでも良い上に不愉快な思い出だ。

「まあ、仕方ないでさ。同じクラスになれば何時でもラブラブでさあ」

そう言つて上目遣いで首を傾げる花太郎――説明しておくと、俺の身長が170センチと少しなのに対して花太郎の身長は160センチにも満たないのだ――に生理的な嫌悪感を抱いたのでその横っ面に張り手を喰らわせた。花太郎が何やら気味の悪い叫び声を上げているが気にしてはいけない、さっさと校舎前の掲示板で自分のクラスを確認するでしょう。

俺のクラスは一年三組だった。ちなみに花太郎も三組で、普通に嬉しそうにしていたので何と無く頭を撫でてみると息遣いが荒くなっていた。殴ったのは言う間でもない。

体育館での入学式も割とすぐに終わった。校長の演説が途中から一人の生徒に対する愚痴になり、見かねた教員連中に引きずられて退場していったのだ。退場する直前に『離せっ！私は今日こそ高井戸に一泡吹かせてやるのだ！』と言っていたのが印象的だった。取り敢えず校長、精神科にでも行け。

体育館から三組の教室に行くと、柔らかな髪質の可愛い女性が教卓の上に座って足をプラプラさせていた。制服は着ていない、多分担任だろう。

「……あー、座席は人数分用意してあるので適当に座っちゃって下さいねー」

教室にきた俺達に気付いた彼女はびょん、と擬音でも付けたくなりそうな感じに教卓から飛び降りると微笑みながら言った。何故微笑んだんだろうか、可愛いから良いけれど。

と言う訳で、俺は他のクラスメイト達が迷っている間にさっさと席を決めた。ちなみに窓際が一番後ろである。目立たないので寝たい時に眠れるし日当たりも良い。

そして、やはりと言うか何と言うか――

「いやー…まさか座席が自由なんてさ、粹な計らいしてくれちゃうよねえ、先生ってば」

――隣の席は花太郎である。今更なので大して思う事も無いが。

「はい、皆さん席に着きましたね。んー…じゃあまず私が自己紹介しまーす」

座席が埋まったのを見計らってから先生は黒板にチョークで自分の名前を書き始めた。

「はい、書けましたー。私の名前は伊月しほり（いつき しほり）といえます。身長は153センチ、体重に3サイズは当然秘密ですよー。趣味はお昼寝で、好きな異性のタイプは一途な年下の男の子です。ちなみに先生は24歳だったりします」

「先生！彼氏はいるんですか？」

真ん中の方の座席に座っていた男子が手を挙げながら先生に問い掛けた。

「うふふ、先生はそんなベタな質問をされると思ってなかったです。一応お答えしておくと居ませんねー」

先生の意見には俺も同意だ。学園ドラマなどで散々遣いふるされた質問を現代において生で聞く事になるとは思わなかった。それより何より、先生に彼氏が居なかった所で、先生のような可愛い女性が中学は野球部でしたオーラ丸出しの坊主頭に恋する訳が無いだろう。我ながら滅茶苦茶な毒舌だとは思うが。

更にいくつか先生に対する質問があったが、どれもさし触りの無い物だった。悪く言えばベタである。

「はい、じゃあ今度は皆さんが自己紹介する番ですよ。廊下側の一番前から順番にお願いしますねー」

自己紹介か…

順番は一番最後だから考える時間は充分にあるけれども、俺は自己紹介が破滅的なまでに苦手だ。中学一年の時は自己紹介で何を言っ
て良いのか分からず十五分以上無言。その結果、教室全体が重い沈黙に包まれるという精神的な大惨事を招いてしまった。

その事が学年中に広がったので二年、三年は自己紹介が免除されたのだが、高校ではそうはいかないだろう。まあ、花太郎は『そもそも自己紹介が免除される事自体が有り得ないでさ』と言っていたが俺が自己紹介を考える時間なんて別に描写する様な物でもないの
以下略。

そしてとうとう、俺の番が来た。

やばい、何だか背中から嫌な汗が出てきた。指先がプルプル震える。

緊張の余り中々席から立てない俺。当然、教室中から俺以外の生徒39人+しほり先生×2＝80の目から放たれる『え？コイツ何してんの』的な視線が殺到した。出来るなら窓から飛び降りて家に帰りたい気分だ。

ええい、ままよ！とヤケクソ気味に立ち上がる。椅子が豪快な音を立てて倒れたが、その程度のアクシデントで今の俺は止められない。いや、もう止まらないの間違いかもしれないが。

教卓の前に立つ。俺の視界内のクラスメイトのほぼ全てが呆然とした様子でこちらを見ている。ちなみに、花太郎は何故かうつとりとした表情だ。腹立たしいので取り敢えず後で殴ろう。

……さて、どうしようか。

順番が一番最後とはいえ、極度の自己紹介能力不全の俺にとってはその程度の時間でどうこう出来る訳が無い。付け足しておく、あらかじめ家で考えておくという選択肢は初めから存在しない。

……さて、どうしようか。

……

……

…

三分後。

「……」

教室内は重い沈黙に包まれている。

これなら、『さっさと喋れ』といった風にヤジでも飛ばしてくれた方がマシだ。

このままだと後十分は沈黙しそうだ。さすがにそれはまずい。

……こうなったら、思い付くまま適当かつ勢いに任せてやるしかない！

バン！と教卓を両手で叩く。すぐ隣に居たしほり先生が驚いたのか手にしていた出席簿を落とす。先生、すいません。

「星城東中学出身、柚木光だ！得意科目と苦手科目は特に無い！趣味は読書、ただし漫画は読まん！好きな動物は猫！好みの異性は丁

度隣にいらつしやる先生のような人だ！以上！質問は受け付けん！」
喉が枯れる程の大声で、一気に言い切った。おまけに、最後に自分でも何をトチ狂ったのか告白まがいの事も口走ってしまった。

……くそ、顔が滅茶苦茶に熱い。恐らく俺の顔は真っ赤に染まっているだろう。

「………」

クラスメイトの沈黙が先程よりも痛く感じる。恥ずかし過ぎて、しばらく先生の方を見る事が出来ない。

「……先生体調が悪いので今日はもう早退しますすいませんさようなら」

滅茶苦茶に熱い顔を手で押さえ、出来るだけ感情を押し殺した声で言つと俺は返事も待たずに走り出した。半開きの扉にぶつかりながら無理矢理教室から飛び出すと、体育祭のリレーでも出ない程の速度で無人の廊下を疾走。靴箱を殴る様にこじ開けて靴を取り出し、上履きをその辺に脱ぎ捨てる。靴に足を突っ込むと転びそうになりながら学校の敷地内から脱出した。

学校前の桜並木が綺麗な道を走りながら考える。「……鞆忘れた。上履きは脱ぎっぱなしで放置してきたし、おまけに明日の時間割も持ち物も分らん」

それより何より――

「――絶対、変人と思われた！」

帰宅してから散々母親に怒られたが、明日以降の学校の方がよっぽど憂鬱だと思った。本当に、どうしようか。

――続く

2：三人のノツポと痙攣気味の変態（前書き）

いやはや、172日更新してませんでした。次からはちゃんと更新していきます…たぶん、きっと（笑）

2：三人のノツポと痙攣気味の変態

アラーム鳴る五秒前に起きて目覚まし時計を止める、それが俺の一日の始まりである。

まだ多少の眠気はあったが、我慢してベッドから起き上がると先程止めた時計を見る。よし、七時ジャストだ。

手早く寝間着を脱ぎ、ハンガーに掛けてあった制服に袖を通す、やっぱりブカブカだ。

自室から出ると洗面所へ、顔を洗う。顔の水分をタオルで拭ってから鏡を見ると、其処には情けない顔をした少年が居た。勿論俺の事だ。

昨日はあれから恥ずかし過ぎて家から一步も出られなかった。花太郎が俺が置き去りにしてきてしまった鞆を持って来てくれた時も扉の隙間から手を出すのが精一杯で、花太郎が学校での反応について話そうとしたので慌てて扉を閉めた。人の頭のような物が挟まった気がしたがすぐに蹴り飛ばしたので良く分からなかった。

思い出すだけで顔が赤くなる。熱を持った顔に水道水を浴びせて無理矢理に冷まそうとしたが、暫く治まりそうもない。

仕方がないので赤い顔のままでもリビングに入ると、赤いエプロンを付けた長身の女性――母さんが不思議そうな表情を浮かべた。

「あん？ お前何だその顔、妙に赤いなオイ」

「いえ、別に何でも無いですよ」

なるべく平静を装って答えるとテーブルに着き、用意してあった珈琲を一口飲む。ちなみに、母さんは俺が敬語を使わないと本気で殴ってくる。昔からの事なので最近では殴られる事も少なくなったのだが、どういう訳か月日を重ねることに母さんの拳の威力が上がっている様な気がする。今年で35歳になるというのに、どうしてこの人は未だに成長が止まらないのだろうか？

「ま、どうせ昨日の自己紹介でトチ狂って滅茶苦茶な紹介した挙句

いきなり学校を早退しちゃったのを後悔してんだろ？」

……どうして筒抜けなんですかね。

「そりゃ、花太郎とはメル友だからな」

「いつの間に……と言うか、何でもまたあんな奴と」

「あたしはあんな感じの可愛い子が大好きなんだよ。ちなみに、前に街で会った時にメルアド交換した」

取り敢えず花太郎は殴ろう、きつと、必ず。

「しっかしまあ……ホントに苦手なんだな、自己紹介」

「小学校の時からですよ」

「花太郎は見た目が可愛いんだけど案外中身が大人びてるからな！あたしは光みたいなクールぶってる割にはドジっ子な方が好きだよ」そう言つて母さんは白い歯を剥き出しにして笑った。何だか恥ずかしくて珈琲を一気に飲み干すが、熱くてむせてしまった。

そんな俺を見た母さんはキラキラと目を輝かせ、テーブルの向かい側から跳躍、俺を椅子ごと床に押し倒した。凄く痛い、物理的にも精神的にも。と言うかテーブル飛び越すってどんな運動能力だ。

「んー、本当に光は可愛いなあ畜生！愛してるぞこの野郎め！」

「背中とか頭とか心とか痛いんで止めて下さいって言うかどれだけ親馬鹿なんだアンタ」

「お前、親馬鹿ってなあ……母さん悲しいぞ。何処の世界に子供を愛さない親が居るってんだ！いや、居ない！だからあたしはおもいつきり愛してやる！」

「いやもう分かりましたから、取り敢えず俺の上から退いて下さい」こんな事を毎日繰り返していると、可愛らしい女性がタイプになるのも仕方が無いと思うんだが。

妙に興奮した母さんから逃げる様に家を飛び出した。当然朝飯は食べられなかったので、予告通り花太郎を八つ当たり気味に殴る。相

変わらず息が荒いが気にしない、と言うか気にしたら負けだ。

登校中、花太郎は昨日の事には一切触れなかった。鞆を届けに来た時の事で身に染みたのか、それとも花太郎が気を遣っているのかは分からなかったがいざ学校に行くとなると情報が皆無だというのは不安だ。

「花太郎」

「何さ？」

「……き、昨日の話なんだが……」

いざ尋ねるとなると恥ずかしくて言葉に詰まってしまう。

「昨日って、昨日の何でさ？」

花太郎が不思議そうに聞き返してくる。くそ、察しの悪い奴め、昨日の、と言った時点で気付け。

「だ、だから昨日の……だな、自己紹介について……何かあるだろ、ほら」

「えー？ 何か、とかそんな曖昧な表現じゃ分からないでさ？ 可愛らしく顔を真っ赤にしながら言ってくれたら教えてあげてもいいでさ」

以前から、怒る度に花太郎を殴ってきたのだが頭がおかしいのかそういう性癖なのか、まるで効果が無かった。なので、そろそろ方向性を変えていこうと思う。

「——そうか。じゃあ別に良い」

なるべく冷たい表情を浮かべて、素っ気なく言ってみる。

「あ、あれ……？ 何か冷たい様な気がするでさ？ どういう心境の変化？」

取り敢えず無視して、俺は早足で学校へと向かう。

「ちょ、ちよつと……！ 何で無視するのさっ、さすがに不安になるから——」

ああ、これ良いな。今度からこの方向で行こう。

学校に到着するまでの間、花太郎はひたすら謝り続けていた。まあ、俺は割としつこい性格なのでもう暫くは放置の方向で行くつもりだ。「それにしても、だ……」

どうしたものか、俺は中々教室に入れないでいた。

何故かと言えば、当然昨日の自己紹介が原因である。もしクラスメイトから痛い人と思われていたなら、俺はきつと母さんに頼み込んで転校するか不登校になるかもしれない。大袈裟と捉えられるかもしれないが俺は至って本気である。大失敗をまったく気にせず学校生活を過ごしていける位なら自己紹介能力不全になんてならない。

——トン。

不意打ちだった。軽く背中を押されて俺は転びそうになりながら教室の扉に顔を強打——という程ではないがぶつけた。地味に痛かったりする。

やってくれたな、花太郎。

仄かに殺気を秘めて、痛む鼻を押さえながら振り向くと、其処に居たのは妙な性癖の美少年——ではなく、長身痩躯で、三白眼。手足が長く猫背、という何とも不気味な男だった。

……でかいな。

俺より頭1つ分以上背が高い相手に思わず後退りして再び扉と頭が衝突。視界の端に映った花太郎といえば、ハアハアと息を荒げながら親指を立てていた。まあ、後で殴る事は確定事項だったりする。

「……ごめんね、ボーっとしてて、さ」

長身痩躯の男がその体よりも薄っぺらい声で言った。目付きは悪いが性格までは悪くないみたいだ。

「あ、ああ……こっちも扉の前でつつ立ってたんだし、気にしないでくれ」

「ああ……うん。じゃあ……教室、入ろう」

そう言くと男はその長い腕で俺の頭の上ごしに教室の扉を開け、俺が教室に背中を向けた状態なのにも関わらず軽く押した。

結果——

「っでえ！」

——俺は教室の入り口で盛大に尻餅を搗いた。初めてぶつかった時から薄々感付いていたが、この男は貧相な体をしているが力が強い。馬鹿力だ。

——ザワザワ

教室の喧騒が耳に届く。心なしか、というか確実に教室が騒がしいのは俺のせい——俺を突き飛ばした眼の前に姿勢悪くつつ立っている男のせいだ。

「おやおや。君、昨日やらかしてくれた……そうそう、柚木君だったかな？」

立ち上がり、埃っぽくなったズボンを叩いていると声を掛けられた。これまた、背の高い男だった。猫背でない分、俺を突き飛ばした男よりも背丈が高く見える。

「……あら、可愛い」

と言った——誰の事を言ったのかは考えたくない——のはその男の隣に居た、これまた背の高い女だった。美少女、というよりは美女という言葉が似合う感じた。

「……やらかした、か」

——やらかした

間違いない、昨日のすっ飛んだ自己紹介の事だろう。

ああ、やっぱり変人扱いは確定なんだな……。

そう思うと、不思議と恥ずかしいという感情は薄れ、諦めの心境——つまりはどうとでもなれ、俺の高校生活という意味だ——に到った。

「え……と？柚木、君？何か今にも消えてしまいそうな顔になっているけど大丈夫かい？」

正面の男が言った。

「いや、気にしないでくれ……どうせ変人だから、俺」

自虐的な笑みを浮かべながら返答をし、俺はちらりと教室の様子を伺う。俺への興味が失せ、俺が現れる前のように雑談に興じる者が

半分。今だにこちらを興味深そうに観察している者が半分、といった所か。

「ふふ…あまり自虐に走らない方がいいわよ？己の評価を徒に下げるだけだから」

「あ、ああ…次からは気を付ける」

この女…本当に高校一年生か？やたらと威厳というか何というか…。

「ま、僕らが君に話し掛けたのは別に君を貶めるためじゃなくて、単純に君と仲良くなりたいたいからだよ」

長身の男が言った。

わざわざ相手から仲良くなるう、と言われるのは悪い気はしないもので、嬉しい半面、それまで自虐的だった自分を恥じた。

ああ、この二人は良い奴なんだな…。

「私好みの可愛い男の子…ふふ」

…俺には何も聞こえなかった。

「それじゃ、改めて自己紹介をしようか。僕の名前は三木原千佳^{みきはら ちか}。

こんな名前だけどちゃんと男だよ」

「私は三木原由佳^{みきはら ゆか}。こっちの千佳の双子の姉よ」

それから、二人は声を揃えて

「よろしく」と言った。何か双子っぽいな。

「……那由多幸哉^{なゆた ゆきや}。よろしくね」

いきなり声が出たかと思えば、長身痩躯の男の自己紹介だった。どうでもいいが、存在感無さすぎる。花太郎もだが。「あつしは田中花太郎。光ちゃんとは切っても切れないなカブツはあ…！」

下らない事を口にしそうだったので花太郎の喉に手刀を叩き込む。奇声を発し床に倒れ、痙攣したかのようにピクピクと動く様子は不気味で、三木原姉弟も那由多も明らかに引いていた。

「今更だけど、俺は柚木光。よろしくな」

俺は極めて愛想よく自己紹介をしたのだが、三人揃って床に伏した花太郎を見る時と同じ表情をしていた。

…人付き合いは難しいな。

「……身から出た錆に気付くべきでさ、光ちゃん……」

恋する乙女は肉食獣（前書き）

携帯が潰れました…。新しい携帯って文字打ちにくいなあ（；；
、
）

恋する乙女は肉食獣

床に伏したままだった花太郎を渋々座席に着かせてすぐに朝のホームルームが始まった。

「柚木君、無断早退はもうしたら駄目ですよー？」

と小さくて可愛らしい我がクラスの担任、伊月しほり先生に言われた時はまた赤面してしまった。恥ずかしくてまた早退したかったが、二日続けてともなれば幾ら伊月先生でも怒るだろうからとりあえず隣に座って——無言で机に伏したままである——花太郎の足の甲を爪先で踏みつけて何とか耐える。

「っ……い……た……！」

「田中君、先生がお話ししてる時は騒いだら駄目ですよー？」

「……は、はい」

世の中とは不条理なものである。

今日は授業が無かった。入学して二日目なので当たり前と言えば当たり前な話である。

「柚木君」

「光君」

そんな訳で帰り支度をしていると三木原姉弟が声を掛けてきた。

「何だ？」

「親睦会でもしようと思ってね」

「親睦会なんて大層な名前だけど、実際はお昼ご飯食べてカラオケかボーリングって予定よ」

親睦会か…。

中学生の時はあんまり学校の帰りに遊んだり、というのが無かった。何故か？決まっている、校則で禁止されていたからだ。

「うん、行こうか」

首肯しつつちらりと長身瘦躯の男、幸哉の方に目を向ければ、丁度あいつは鞆を手に教室を出ていく所だった。

「那由多っ」

少し離れていたので語気を強めて呼ぶと、幸哉はゆっくりと振り向き、不思議そうな表情で己の顔を指差した。

俺がそれにうん、と頷くと幸哉は近くまでやってきた。

「どうか、した…?」

「親睦会やるんだ。後ろの二人と」

そう言つて振り返ると双子は笑顔で揃つて手を振っていた。やっぱり双子だ。

「良かったらお前も行かないか?」

幸哉は暫く考え——真顔で数秒間不動だったので少し恐かった——

うん、と頷き

「僕も、行きたいな…」

につこりと微笑んだ。

今日一日だけで充分分かった事だが、幸哉は三白眼な上に猫背で無口。正直言つて不気味な分類に入るだろう。

しかし、幸哉の手入れやセツトとは無縁そうな長くて黒い髪はサラサラで、目付きを除けば顔立ちも悪くないのだ。

そんな幸哉の満面の笑みは破壊力が高かった。ギャップも手伝つて不覚にもドキツとしてしまった。

後ろの双子も目を丸くしつつ幸哉を凝視していた。

「ああ……いい」

とか

「可愛い、かも」

とか、人のまばらな教室のあちこちから聞こえてきた。恐るべし、ギャップ萌えといった所か。

「じゃ、四人で行こうか」

と言つ千佳の台詞で気を取りなおした俺は咳払いをし——違和感に

気付いた。

「花太郎が居ない…？」

クラスメイトに聞いてみた所、花太郎はホームルームが終わってすぐに、しかも俺に気付かれない様にこっそりと帰ったらしい。

まあ、四六時中一緒に居る訳でも無いし側に居てくれないと困る訳でも無いので特に気にしないでおく。

そして俺は学校の最寄り駅周辺の繁華街まで来ている。

この街は大都市という程では無いがそれなりに栄えている。都心へも乗換え無しで行ける駅の正面から伸びたメインストリートは若者が寄り道して楽しむには充分な店のラインナップだ。

「そうそう、昼飯何処で食べるんだ？」

隣を歩いていた千佳に尋ねた。

それにしても背が高い。聞いてみた所、千佳の身長は188センチ。由佳は179センチ。幸哉は何と191センチらしい。

三人とも俺より最低でも10近く背が高いので何だか四人で歩くのが憂鬱だ。畜生、お前ら皆日本バレーの未来でも担ってる。

「——に行こうとしてるんだ。新しく出来たらしく…って、柚木君？聞いてた？」

まるで聞いて無かったな。

「だから、新しく出来たハンバーガー屋に行こうって話。チェーン店じゃないから少し値は張るけど美味しいって評判らしいね」

「私も行った事無いから行ってみたいんだけど、光君は嫌かしら？」

「別に。俺も千佳の話聞いて行きたくなかったしな」由佳の問いに答えつつ幸哉に視線を向けると幸哉はいつもの無表情で頷いた。別に構わないらしい。

それからメインストリートを歩く事数分。目当てのハンバーガー屋に着いた。

外装は喫茶店に似ている。店内も落ち着いた色彩に暗めの照明と、チェーン店とは駆け離れていて、一見してハンバーガー屋には見えない。

フロアの面積はあまり広くはなく、カウンター席が15席。4人用のボックス席が2つと、いかにも個人経営の香りを漂わせていた。

「いらつしやいませ。四人様でよろしいでしょうか」

「はい」

「御案内します。こちらの席へどうぞ」

私服にエプロン姿の女性店員に案内され席につく。俺の隣には幸哉。正面には由佳、その隣は千佳だ。

「ご注文がお決まりになりましたらこちらのベルを鳴らして下さいね」

人数分のおしぼりと水の入ったグラスを置くと店員は奥に引っ込んだ。

「どれどれ…」

テーブルにあったメニューを手を取った。

ハンバーガー 350円

チーズバーガー 380円

BLTバーガー 420円

その他に何種類かのハンバーガーがあるようだ。

確かに割高だが、メニューの写真を見るからにサイズはチェーン店のそれよりも大きい。

ちなみに+250円でドリンクとポテトが付くらしい。値段は高いがこの辺はチェーン店と同じ様だ。

「んー…僕はハンバーガーかな。単品で良いや」

千佳がオーダーを決めると由佳も

「私も同じで良いわ」と言い、幸哉も

「同じの」と言った。

「じゃ、俺もハンバーガーにするか」

先に言っておくと、別に三人とも同じ物にしたからハンバーガーに

した訳じゃ無いぞ。

「…何、言ってるの?」

「いや、別に」

うつかり口に出していたらしい、幸哉に突っ込まれた。地獄耳め。

オーダーを済ませ店員がまた奥に引っ込んでからずっと由佳が無言で俺に視線を向けている。

目が合うと由佳は微かに微笑み、そしてまた視線を俺にぶつける。少し恥ずかしかったが何も言わなかった。

すると由佳は身を乗り出し、更に顔を近付け、下からのアングル――いわゆる上目遣いである――で見つめてきた。

艶のある由佳の黒く長い髪から良い香りがする。シャンプーの香りだろうか?

そんな事を考えながら俺は由佳の額に人指し指を沿え、軽く押し退ける。

「近い。しかも凝視する意味が分からん」

渋々といった風に、額をさすりながら元の体勢に戻った由佳は「観察よ、観察」と言った。

…何か恐いな。「由佳は好みの男の子を見付けたらそれはもう…執拗に獲物を狙う肉食――」

「…千佳?」

寒気がした。

直前まで饒舌だった千佳は由佳の一言で萎縮してしまい、明後日の方へと視線を向けている。

幸哉は無表情。内心どうかは分からないがな。

「何て言うのかしらね…顔も好みなんだけど、そう、雰囲気が好きなの」

急に由佳が語り始めた。

「ツンツンしてる割には意志が弱い所とか、照れ屋であがり症な所とか、思わず虐めて凹ませてから慰めたくなるのよ」

俺の好きな所を挙げていく由佳の顔は恋する乙女——ではなく、さながら肉食獣染みた笑顔だった。

「出会ったばっかで良く見てるんだな……」

犯罪染みた笑顔の由佳だが、言っている内容は的を得ていた。不本意だが、由佳の観察力は一級品だ。

「突っ込み所が違っよ、柚木君……」

「……恋、してるんだね」

幸哉、良い感じの笑顔で勘違い発言は止めてくれ。それと千佳、突っ込みを入れるならもう少し声を張れよ？まあ、由佳が恐いのは分かるがな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7418b/>

光になれっ！

2010年10月25日01時10分発行